第33回

2023 福祉住宅建築助成実例集

# ふれあい

バリアフリー住宅施工例

公益財団法人
ノーマライゼーション住宅財団

# 私たちの「願い」

## 公益財団法人として

私たちは、公益に資する法人として、
「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」という
ノーマライゼーションの理念に基づき
高齢者や障がい者が安全で安心して快適に暮らせる住生活の整備、 向上を通して
すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与すること
とを目的に、すべての事業に取り組んでおります

私たちのこの「願い」のため
尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう
心からお願い申し上げます。

# 「真」のバリアフリー普及を目指して

まだ「バリアフリー」という言葉も「ノーマライゼーション」という言葉も聞き慣れなかった平成元年。その普及に貢献したいという想いでノーマライゼーション住宅財団は設立しました。

当財団がバリアフリーの普及を目指して設立以来継続している事業の1つに、バリアフリー住宅の新築やリフォーム物件を公募・助成する「福祉住宅建築助成事業」があります。応募いただいた物件のなかから建築、福祉、医療など様々な分野の皆様から高い評価を受けた実例を紹介するのが、この「ふれあい」です。年に１度実施する「福祉住宅建築助成事業」に伴い発行する小誌の発行も、おかげさまで33回目となりました。

時は平成から令和に移り、「バリアフリー」「ノーマライゼーション」という2つの言葉は国民に広く認知されています。しかし家づくりや街並みは、この2つの言葉を具現化しているでしょうか？高齢者や障がい者は笑顔で暮らしているでしょうか？超高齢社会に突入し、国連が制定した「障害者の権利条約」に批准し、世界水準の福祉国家を目指す宣言をした日本に、その2つの言葉、理念を根付かせていきたいという当財団の設立以来の想いは、いささかも変わることはありません。

発刊にあたり、取材にご協力くださいました建築主の皆様、並びに選考にご協力いただきました審査委員の皆様に、心より御礼申し上げます。

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団　　理事長　土屋 昌三

ふれあい

# 目　次

～表紙イラスト～
中井 亜佐子さん

札幌市在住のイラストレーター。
北海道造形デザイン専門学校
グラフィックデザイン科出身。
北海道イラストレーターズクラブ
アルファ会員。


「真」のバリアフリー普及を目指して　（公財）ノーマライゼーション住宅財団　理事長　土屋　昌三

ずっと先まで安心・快適
やりたいことができる家 …… 4

新築タイプ

家族みんなが笑顔で過ごす
車いすで隅々まで行ける家　北海道旭川市　S様邸 …… 6

2人の障がいと体の変化に
匠の伝統的技術で対応　長野県佐久市　H様邸 …… 8

ワンルームのような間取りで
介助の負担を大幅に軽減　新潟県長岡市　Y様邸 …… 10

前宅で学んだ知識を駆使
将来も安心な暖かい住まい　茨城県つくば市　S様邸 …… 12

第33回福祉住宅建築助成 審査委員（敬称略・順不同）

審査委員長　北海道科学大学 名誉教授　菊地　弘明

審査委員

北海道デザイン協議会 名誉会長　大阪　克彦
㈱北海道住宅新聞社 代表取締役　白井　康永
㈲環工房　代表取締役　牧野　准子
フリーライター(「ふれあい」制作担当)　西村　裕広
北海道社会福祉協議会 事務局次長兼地域福祉部長　庄田　香織
札幌市社会福祉協議会 常務理事　菱谷　雅之
北海道新聞社 編集局 生活部次長　木嵜　美和


身体状況の変化に考慮し柔軟に対応できる住まい
秋田県潟上市　S様邸　14

リフォームタイプ

まだまだ人生現役90歳 高齢でも自立生活できる家
東京都世田谷区　F様邸　16

優れたデザインと機能性で生活をエンジョイできる家
北海道石狩市　K様邸　18

MSの特性を見極め、機能性デザインとも極上の完成に
東京都世田谷区　Y様邸　20

労働者の町から福祉の町へ
山谷の「今」を訪ねる　22

# ずっと先まで安心・快適
# やりたいことができる家

昨年度、当財団が実施した「福祉住宅建築主助成事業」に多数ご応募いただいたなかから、特に優れた新築5例、リフォーム3例、計8つのバリアフリーの実例を紹介しています。今回は、住む人たちの「先々の変化への対応」に重きを置いた作品が顕著でした。

## 身体の変化を見越した住環境

「先々の変化」とはどういうことでしょうか。例えば障がいのある家族のためにバリアフリーを施す際、その障がいに応じて最大限の配慮や工夫を凝らすのが基本中の基本であることはいうまでもありません。しかし、その障がいの度合いや状態が時と共に変化していくケースがあります。例えば筋力が時間と共に低下する進行性の難病は複数種ありますが、いずれも具体的にどのような身体機能の低下が表れるのかということを予測するのは困難です。あるいは進行する速度も、人によって異なります。緩やか、あるいはほとんど変化が生じないようなケースもあれば、逆に速い速度で進行するケースもあるわけです。

進行性の難病に限ることではありません。足に障がいがあり杖を使っていた人が、加齢と共に杖を支える腕、体幹などが弱くなることで、車いすが必要になるケースもあります。高齢に伴う身体機能の低下についても、まったく同じことがいえるでしょう。さらには介護するご家族も、加齢と共に体力は落ちてきます。

障がいのある人だけではなく、家に住む家族全員の変化に対して、いかに対応でき

るか、変化が起きたとしても使いやすく快適か。この大変難しい課題に取り組んでいる実例は、前回の福祉住宅建築主助成事業から増えてきました。理想の家づくりの基本として〝安心・安全〟〝快適〟という要素が挙げられますが、さらに〝長く住める〟という要素は、障がいのある人はもちろん、すべての人にとって大変重要です。長く住めるという家づくりの課題を見事に具現化した実例を、ぜひご覧ください。

## 「できることをやる」を大切に

もう一つ注目したいのは〝やれることをできる家〟が多かったことです。障がいがあること、あるいは高齢と共に身体機能が低下することで、世間や家族に対して「迷惑をかけてしまっている」という負い目を持ってしまう人は少なくありません。だからこそ、自身でやれることが増えると自信につながります。現実的にハードもソフトもバリアフリーが遅れがちな日本で生活していると、障がい者や高齢者のいる家族はどうしても過保護になりがちです。しかし、それは保護を受ける人たちにとって好ましいことではありません。

障がいがあっても、できることをやりたい。高齢でも自分たちの力で生活したい。そうした〝生きる力を後押し〟するような家づくりの実例も紹介しています。

## 変わりゆく「労働者の町」山谷

特集では「山谷」の現在をレポートしています。高度成長期、建設ラッシュに沸く東京の街づくりに日雇い労働で従事した労働者たち。通称「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所が建ち並び、そうした労働者を受け入れてきた地域が山谷です。長引く不況、小泉政権下で最盛期の6割に縮小した公共事業。そのあおりを受け、増加した路上生活者、高齢に伴い行き場を失った労働者を、山谷で永年懸命に支援しているNPO法人を取材しています。

新築部門

# 家族みんなが笑顔で過ごす 車いすで隅々まで行ける家

「車いすのままスムーズに移動できる」という大きなテーマと共に、家族のみんなが楽しく快適に過ごせる家づくりを実現しました。ご両親も、そして活発な性格で元気いっぱいの姉妹が楽しく団らんでき、かつ家族それぞれが思い思いの時間を過ごせるようプライバシーにも配慮。優れたアイディアが随所に施されています。

## 先々まで安心快適に暮らせるように

Sさんは4人家族。二女に筋力の低下が見つかったのは3歳ごろのことです。Sさんの仕事は転勤が多く、当時生活していたのは他県のマンションでした。転勤ごとに二女が不自由なく暮らせる条件の住まいを探すのは大変困難です。二女が先々も安心・快適に生活できる環境を用意したいと考えた結果、奥様の実家がある旭川に新居を構えることに決めました。

以前のマンションは、「車いすでリビングから自分の部屋に行けない」ということが二女の大きなストレスになっていました。そこで新しい家を建てるにあたり、二女が隅々まで自由に移動できるようにするのを最重要の課題にします。そのためのアイディアを、地元で知名度の高い工務店に相談したところ「弊社では困難」と断られますが、かわりにバリアフリーを得意とする企業を紹介してくれます。その1つが石山工務店でした。二女が前宅で抱えていたストレスを完全に解消できるよう家中への移動を可能にし、屋外にもスムーズな出入りが可能に。二女と共に家族全員の毎日の暮らしが快適になるような工夫も随所に凝らしています。

見事な完成を実現した石山工務店、Sさんご家族の希望が叶うよう親切に他社を紹介した工務店の姿勢、両社の想いも込められた新居で、ご家族みんなが笑顔で楽しく暮らしています。

### 北海道旭川市　S様邸

**～家族構成～**

4人　夫妻・長女・二女

**～年　齢～**

夫：40代前半
妻：40代前半
長女：10代前半
二女：10代前半

**～ご家族の身体状況～**

二女に筋力低下が見られ、移動には車いすを使用。入浴や更衣に介助が必要

**～新築にあたっての要望～**

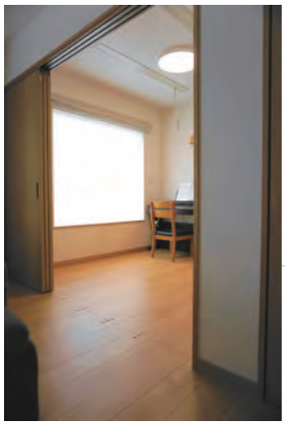
- 車いすでも家中移動できる
- 二女だけでなく長女、家族全員が不便なく快適に生活できる

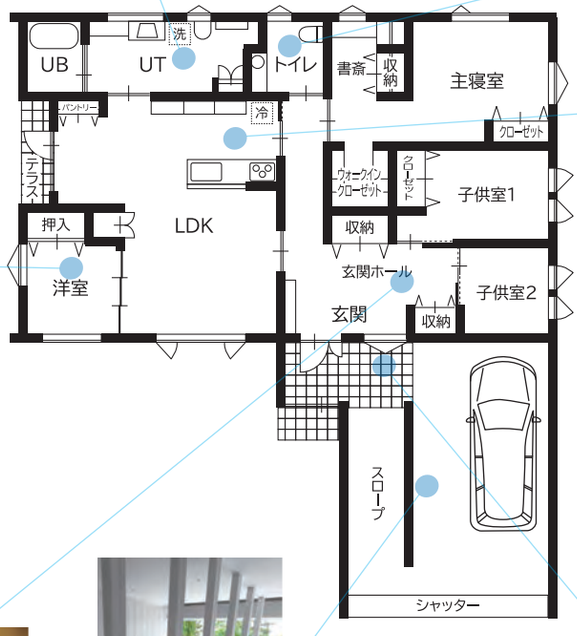
## ～２人で使えるUT～

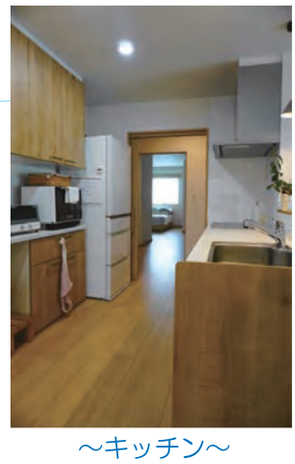
広々のＵＴに置いた洗面台のすぐ脇には大きな化粧台。朝の慌ただしい時間に娘さんが２人で同時に使えます。

## ～トイレ～

介助者といっしょに入れる十分なスペース。便器の位置、方向も慎重に検討しました。





## ～特等席の洋室～

多目的の洋室は、四季のうつろいを一望できる大きな窓のある、この家の特等席です。

## ～キッチン～

二女が不調時に寝室で休んでいる時、家事をしながらでもしっかり見守れます。もちろん移動もスムーズ。

## ～子ども部屋への動線～

二女の部屋にはリビングから直線移動で出入りできるよう、間取りとドアの位置に配慮しました。

## ～スロープと駐車スペース～

高低差をミリ単位で計算しながら傾斜を最小限に抑えたスロープは、大型車が乗り入れられる駐車スペースまで風雨にあたらず行き来できます。

## ～ひろびろ玄関～

車いすを３台置いても余裕のスペース。二女の車いすの乗り換えがスムーズなように、そして障がいのあるお友達でも来やすいようにと考えました。

## ～余裕の回遊動線～

車いすのまま家中に移動できる余裕いっぱいの回遊動線を実現しました。

設計・施工

㈱石山工務店

旭川市東 4-8-1-15

☎0166-22-1480

http://www.1480.jp


DATE

| | |
|---|---|
| 構　　造 | 木造在来工法 |
| 延床面積 | 182.80 ㎡ (55.29 坪) |
| 1 階床面積 | 182.80 ㎡ (55.29 坪) |

新築部門

# 2人の障がいと体の変化に匠の伝統的技術で対応

間仕切りや開口はほとんど設けず、ほぼワンルームに近い間取りにしました。身体状況の変化、必要に応じて、機器などを追加で施工していけるよう、すべてのスペースに余裕を持たせています。詳細で具体的だったＨさんの要望を、設計・施工を自ら行う職人ならではの柔軟なアイディアで具現化しました。

## 「木組み」の魅力と長所をフルに活用

Ｈさんご夫妻の2人のお子さんは共に、筋力が低下していくデュシェンヌ型筋ジストロフィーという進行性の難病です。これまでは借家で生活していましたが、子どもたちが将来に渡って不自由のない日常を送れるようにと新築を決めました。

2人のお子さんは共に年齢10代で成長期に入っています。難病と成長に伴う身体状況の変化に対応できる住環境。それは大変難しいテーマでしたが、Ｈさんご夫妻はかかりつけの作業療法士から助言をもらいながら、長く快適に住み続けられる家づくりの構想を細部に至るまで温めていました。

ところがそのプランを複数のハウスメーカーに相談すると、オプション設定ばかりになってしまうため費用が膨大に。そこで相談したのが、伝統的な木組みの家づくりを主体としている地元の小さな工務店です。この会社はバリアフリーの実績はほとんどありませんでしたが、Ｈさんご夫妻の要望を細部に至るまでしっかり聞き取りながら木組みの建築工法に落とし込み、想定した予算内で想定以上の完成を実現しました。

日本の匠(たくみ)に息づく伝統技術、そして木という素材の長所を存分に応用した、現代の家づくりではなかなか見られない、目からうろこのアイディアが随所に詰まっています。

### 長野県佐久市　Ｈ様邸

**～家族構成～**

４人　夫妻・長男・次男

**～年　　齢～**

夫　：40代後半
妻　：40代前半
長男：10代後半
次男：10代前半

**～ご家族の身体状況～**

長男と次男が進行性の難病。少しずつ介助の必要性が増している

**～新築にあたっての要望～**

- 息子兄弟の身体状況が変化しても生活がしやすい
- 介助の負担を軽減できる工夫

## ～２つのトイレ～

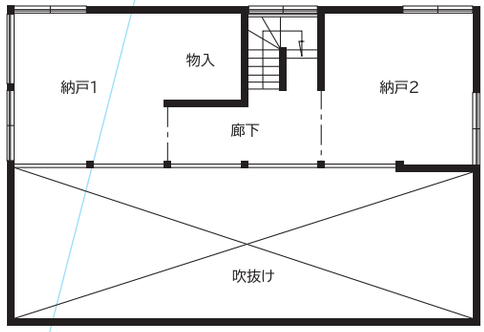
子どもたちが同時のタイミングで使用したくなった場合に備え、トイレは２カ所に置きました。どちらもトイレ使用時に車いすから移乗するため必要なスペースを確保しています。

## ～移乗スペースのカーテン～

１つのトイレは移乗スペースの１部を物置としても活用。来客の使用時などに備えカーテンで仕切れるようにしました。

## ～木製のスロープ～

ベストな角度のスロープは棟梁自ら制作。先々使いにくくなったら造り直すことも可能です。一般的なスロープよりも低価格で制作できるのも利点。



## ～規格外の引戸～

車いすの移動を考慮して、トイレ・洗面所にはサイズの大きな引戸を施工しました。

## ～玄関～

車いすのまま自力で出入りしたいという要望を土間のような玄関で実現。車いす収納はカーテンを引けるように。既製品にはないサイズの一枚引戸は建具職人が制作を手掛けています。

## ～薪ストーブ～

暖気の循環、そして車いすへの安全性にも十分配慮して、念願の薪ストーブを設置。木組みの居心地の良さとあわせて、家中が暖かくなります。

## ～移動しやすさ抜群～

間仕切りがほぼ無いので移動のしやすさは抜群。ダイニングテーブルや子どもたちの〝メインスペース〟小上がりも、移動に配慮した場所に配置しています。


設計・施工

片井工務所

長野県佐久市新子田 952-3

☎0267-68-3063

https://kataikomusho.amebaownd.com


DATE

| | |
|---|---|
| 構　　造 | 木造在来工法 |
| 延床面積 | 119.25 ㎡ (36.07 坪) |
| 1 階床面積 | 79.50 ㎡ (24.05 坪) |
| 2 階床面積 | 39.75 ㎡ (12.02 坪) |

新築部門

# ワンルームのような間取りで介助の負担を大幅に軽減

車いすで使用するのに充分な広さを確保しているすべてのスペースを、同じく車いすでも余裕で移動できる動線で結んだ結果、まるでワンルームのような一体感のある空間になりました。それでいて家族のプライバシーにもしっかり配慮。障がいがあってものびのびと生活できる理想の家づくりです。

## 障がいがあってもお手伝いできる家

Yさんの長女は四肢麻痺の障がいがあり、生活におけるほぼ全般で介助が必要です。ご家族は長年、賃貸のアパートで生活していましたが、段差が多い、間口が狭く車いすでの移動が困難など不便が多々ありました。そして長女が成長期を迎え身体が大きくなるにつれ、介助の負担も増加。ご両親の加齢とともに体力が低下することを考えると、その環境では家族全員の生活が立ちいかなくなると判断し、新築を決断します。

新たな住まいを建てるにあたり、大きな2つのテーマがありました。1つは介助の負担を可能な限り軽減し、家族全員が健やかに過ごしていける家。アパートでの生活で不便を感じていた点を考慮しながら、様々なアイディアを盛り込みました。

そしてもう1つの重要なテーマは、長女がやりたいことをできる家。とても自立心が強い長女は常々「お母さんのお手伝いをしたい」と言っていました。できることは限られているかもしれないけれど、新居はその「限られていることができる」気持ちを尊重しています。障がいがあることで「周囲に迷惑をかけている」と思い込んでしまう人は少なくありません。しかし、できることが増えることで自信が芽生え、自立心の後押しにつながります。家族みんなの思いが込められた素晴らしい完成になりました。

新潟県長岡市　Y様邸

**～家族構成～**

4人　夫妻・長男・長女

**～年　齢～**

夫：40代後半
妻：40代前半
長男：10代前半
長女：10代前半

**～ご家族の身体状況～**

長女に四肢麻痺の障がい。生活の多くで介助が必要

**～新築にあたっての要望～**

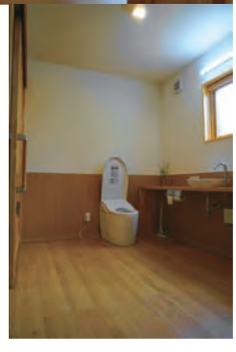
- 移動に車いすが必要な長女が隅々まで、単独で移動できる
- 長女が家事を手伝える
- 介助の負担を軽減できる配慮

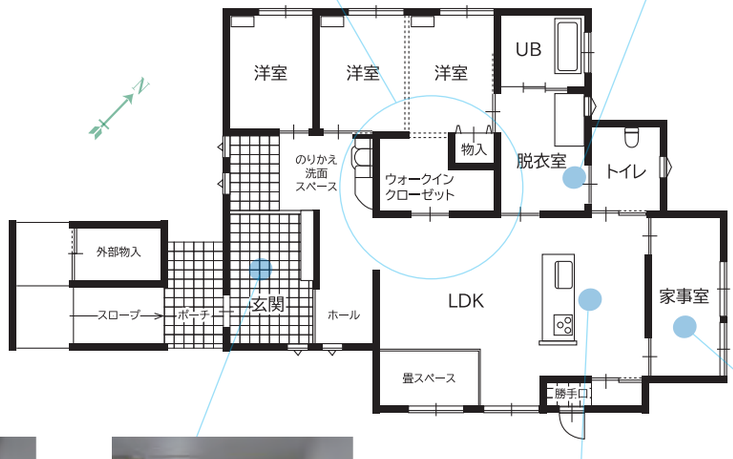
## ～すべてのスペースを結ぶ動線～

リビングを中心に、家中どこのスペースにも車いすで移動できる回遊動線を取り入れました。開口部には規制品にないサイズの大きな引戸を採用。

## ～広いUT、トイレ～

入浴用の車いすの乗り換えを考慮して、ユーティリティはゆったりと大きく。隣り合っているトイレは介助者といっしょに入っても余裕のスペースです。





## ～玄関ホール～

２方向からアプローチできる玄関ホール。車いすが出入りするほうにはカーテンが引けるようになっています。

## ～家事室～

洗濯物を干す家事室には、お手伝いできるよう電動昇降式の物干しを採用しました。

## ～キッチン～

車いすでもぐるりと一周できるよう、アイランドキッチンは周囲に充分なスペースを取って配置。座ったまま調理や洗い物のお手伝いができるバリアフリータイプを採用し、軽く先端を押すだけで水を出したり止めたりできる蛇口も取り付けています。


設計・施工

㈱I・B・ホーム

新潟県長岡市亀貝町 443-4

☎0258-21-2858

http://www.i-b-home.com


DATE

構　　造　木造在来工法
延床面積　154.23 ㎡（46.56 坪）
１階床面積 154.23 ㎡（46.56 坪）

新築部門

# 前宅で学んだ知識を駆使 将来も安心な暖かい住まい

家の中では基本的に杖を使用して移動している奥様ですが、先々齢を重ねると車いすを利用するようになるかもしれません。どちらでも１Ｆ部分の隅々まで移動できるように考えられています。地震が多い地域であることに考慮して耐震性も強化。そのため必要な柱もゾーン分けに上手く活用しています。

## バリアフリーの原則をしっかり踏襲

Ｓさんの奥様が脳出血で倒れたのは約10年前。幸い一命はとりとめましたが、右半身の麻痺と失語症の障がいが残りました。住んでいたのは公務員住宅で、特例を受けて手すりなどを施工して奥様の身体状況に対応できるようにしたものの、築の古い住宅は不便が多々ありました。

Ｓさんは定年と共に地元である茨城に新居を建てる計画を持っており、それを実現したのが今回紹介するお住まい。奥様の身体状況にも十分配慮し、使いやすさはもちろん、これまで札幌に赴任した際に経験した公務員住宅での冬の寒さを教訓に、ヒートショックなどにも考慮した暖かな住環境の実現もテーマにしました。パートナーとなった施工会社は、茨城県内にある北関東最大級の展示場で複数の企業と相談の上選んでいます。

公務員住宅は不便が多かったものの「有効なバリアフリーはどうすべきか」ということを学ぶ機会を得ることができました。例えば手すりの施工は、奥様が最も使いやすい箇所に正確に設置すること、先々、必要に応じてどこにでも施工できるよう下地材を施工しておく必要性などの知識を、新居の設計にも最大限に役立てています。重い障がいが残った奥様ですが、快適になった環境の中で気持ちも前向きになり、週６日のハードなリハビリにも一生懸命取り組んでいます。

### 茨城県つくば市 Ｓ様邸

**～家族構成～**

３人　夫妻・二女

**～年　　齢～**

夫：60代前半
妻：60代前半
二女：20代後半

**～ご家族の身体状況～**

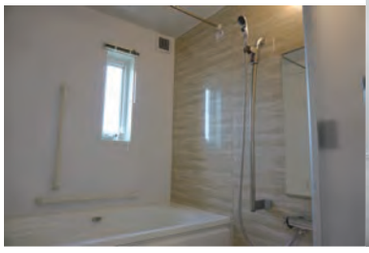
妻に右上肢に２級・下肢に３級の障がい。生活の多くで介助が必要

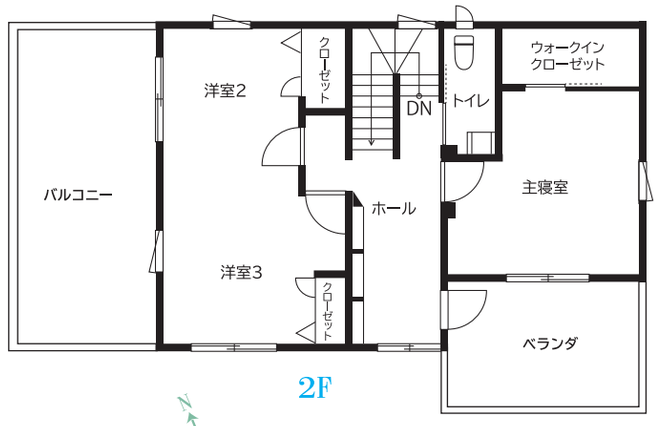
**～新築にあたっての要望～**

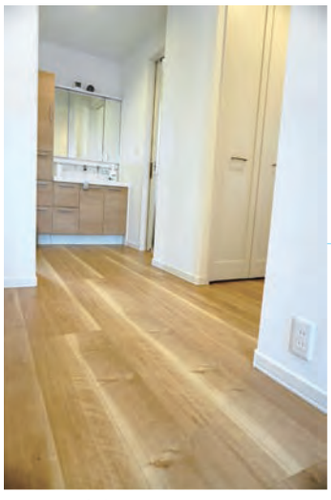
- 妻をはじめ家族全員が使いやすく、安らげる住環境
- 家全体を暖かく
- 高い耐震性能

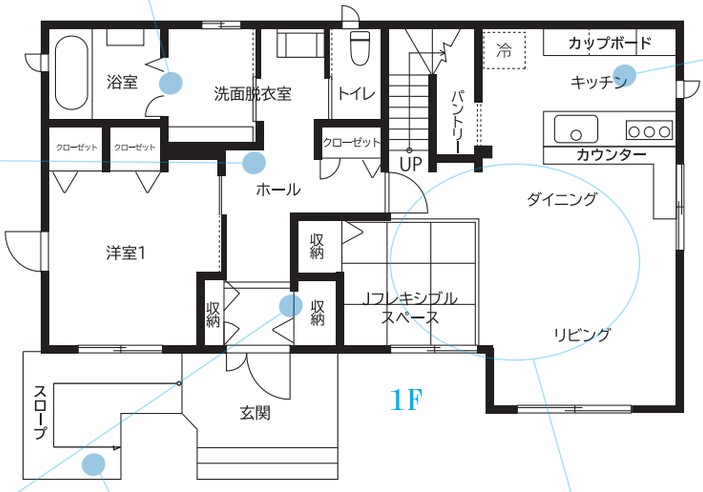
## ～浴室の配慮～

全開できる折戸は身体が不自由でも浴室に移動が容易。シャワーのスライドバーは手すりも兼ねています。





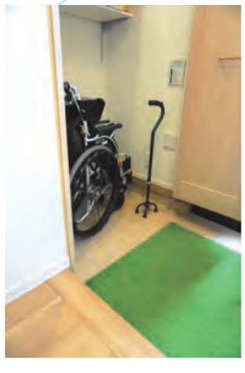


## ～余裕のスペース～

各スペースに続くホールは十分なゆとりを。車いすでの移動にも支障はありません。

## ～キッチンまわり～

周囲を余裕あるスペースにし、タッチレスの蛇口を採用するなど、奥様が作業できるための機器も導入しています。



## ～車いすの収納～

奥様が外出時に使用する車いすや杖がきれいに収まり、使用時もスムーズに出せる収納スペースを設けました。

## ～スロープと手すり～

表玄関のスロープは折り返して設置することで角度を緩やかに。手すりは滑りにくい素材で奥様の握力でも握りやすいタイプを選びました。

## ～広々空間～

メインスペースのリビング・ダイニングと畳敷きのフレキシブルスペースが隣り合わせの間取りにして、メインスペースを広々と。車いすでも杖でも移動しやすいです。


設計・施工

茨城セキスイハイム㈱
つくば支店

茨城県つくば市研究学園 3-19-4

☎029-879-7687

https://www.ibaraki-heim.co.jp


DATE

| | |
|---|---|
| 構　造 | 鉄骨構造 |
| 延床面積 | 133.58 ㎡ (40.41 坪) |
| 1 階床面積 | 80.08 ㎡ (24.22 坪) |
| 2 階床面積 | 53.50 ㎡ (16.18 坪) |

新築部門

# 身体状況の変化に考慮し 柔軟に対応できる住まい

奥様の身体機能への配慮はもちろん、ご夫婦２人のライフスタイルにぴったりのアイディアが隅々まで盛り込まれています。奥様の日常的な動作や移動を的確にサポートできる手すりの配置、近隣とのコミュニケーションや屋外で安全に過ごせるための工夫など、これまでの生活をしっかりと振り返りながら生まれた知恵を形にしました。

秋田県潟上市 S様邸

**～家族構成～**

２人　夫妻

**～年　　齢～**

夫 ：30代後半
妻 ：30代後半

**～ご家族の身体状況～**

妻が脊髄小脳変形症。歩行に杖や車いすを使用。生活の大部分は介助の必要がないが、先々に身体機能低下の可能性がある

**～新築にあたっての要望～**

- 先々の身体状況の変化に対応できるような配慮
- 近隣との交流や車いすでも屋外に出やすいように

## 屋外に出入りしやすい工夫も

Sさんご夫妻は共に30代。奥様の体調に異変が表れたのは6年ほど前です。診断は脊髄小脳変性症という進行性の難病で、この先運動機能の低下や、さまざまな症状が出てくる可能性があります。

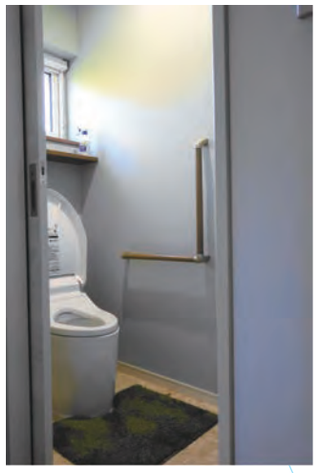
奥様は歩行やいくつかの生活動作に困難がありますが、介助はさほど必要ありません。しかし身体状況がどのように変化していくのかわかりません。これまで生活していた家では将来的に不安があったため、先々を考え新居を建築しました。

必要に応じて杖や車いすを利用しているため段差解消は必須。もし今後車いすのみの移動になったとしてもアプローチできないスペースが生じないよう、室内の通路などは幅を広く取っています。手すりの位置は、これまでの生活、行動を振り返りながら、必要に応じて的確なものを施工していきました。奥様は「手すりだけでなく多くの福祉機器は、たとえ同じ障がいでも必要なものは人それぞれ異なります」と説明します。これからバリアフリーの家づくりをする人たちには「自分と同じように暮らしや動作を振り返りながら、最適なものを選択してほしい」と強調していました。

もちろん難病の進行の可能性に不安はありますが、それ以上に楽しむことを大事にできる家づくりを実現しました。奥様が家に閉じこもらない配慮も欠かしていません。

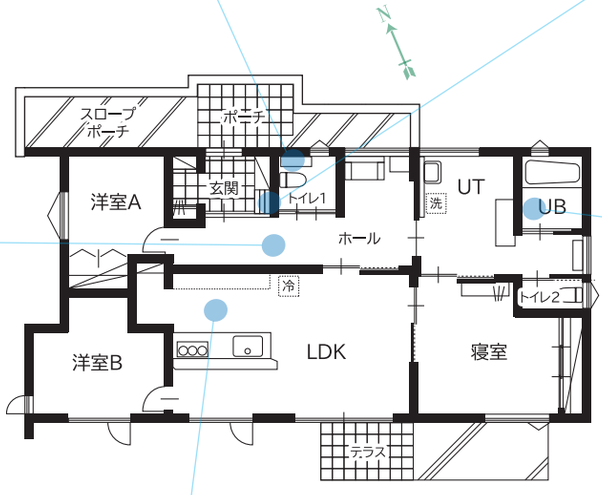
## ～２つのトイレ～

使用時間にどうしても差が出てしまうため、思い切ってトイレは２つにしました。もちろん奥様用は手すりもバッチリ。



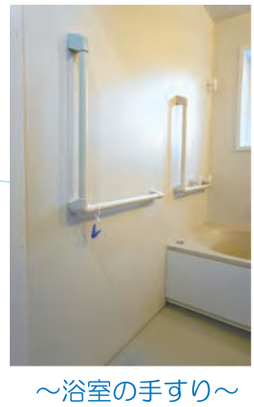
## ～玄関の手すり～

靴を履いたり脱いだりするベンチまで屋内外から安全にアプローチできるよう、手すりは奥様の動作を確かめつつ慎重に施工しました。



## ～まっすぐな動線～

ホールは玄関や各スペースへの移動がしやすいようまっすぐな動線を確保。車いすでも移動がスムーズです。



## ～浴室の手すり～

熟慮の末施工した手すりが奥様単身での入浴をしっかりサポートします。

## ～キッチンの工夫～

奥様も調理ができるようスペースを大きく取り、作業をサポートする手すりも施工しています。

## ～小物のチョイス～

センサーで石鹸が出る機器や置きやすいコップ、手が不自由でも使いやすい小物を用意しました。

DATE

| | |
|---|---|
| 構　造 | 木造在来工法 |
| 延床面積 | 98.41 ㎡（29.71 坪） |
| 1 階床面積 | 98.41 ㎡（29.71 坪） |


設計・施工

㈱土屋ホーム

秋田支店

秋田県秋田市御所野地蔵田 2-2-9

☎018-826-0511

https://www.cardinalhouse.jp

## ～スムーズに移動できる敷地内～

敷地の大部分をコンクリートで覆いました。奥様が現在も、そして先々車いすになったとしても、自由に移動して屋外の行動を楽しめるための配慮です。

リフォーム部門

# まだまだ人生現役90歳
# 高齢でも自立生活できる家

Ｆさんたってのご希望だった「白を基調にした明るい室内」を実現。フローリングも明るい色合いで統一しました。参考にしたのは息子さんのお住まいです。リビングと寝室の間にあった壁を無くして開放的にし、以前はあちこちにあった段差もすべて解消しました。

## 信頼度抜群の企業と二人三脚で実現

90歳を目前に控えたＦさんと、同い齢の奥様。すっかり安全・快適になったお住まいでの暮らしは2年目を迎えました。約40年暮らした家をリノベーションするきっかけになったのは息子さん夫婦です。ご自身やご家族の将来に備え、Ｆさんより一足早くリノベーションを行っていました。その生まれ変わったお住まいを訪れたＦさんご夫妻は、見違えるように明るく快適になった様子を見て「家はこんなにも快適に変わるものなのか」と感激します。もともとＦさんも奥様も自分たちの力で暮らしを続けたいという気持ちが強く、そのために必要な家の機能性や安全性を向上させたいと考えるようになり、息子さん夫婦に相談。協力し合ってリフォームを実現しました。

息子さん夫婦はご自身の家を改装した際、独自に情報を収集しました。すると活用できそうな助成金が多々あることを発見します。そこで複数の企業に適応できるか相談してみましたが、申請等に手間取るためか「知りませんでした」、「その助成金は該当しないです」と、そっけない返答ばかりでした。唯一の例外が土屋ホームトピアです。希望を叶える家づくりに活用できそうな助成金を、労力を惜しまず調べる誠実な対応に、すっかり信頼度が高まりました。もちろんＦさんのお住まいのリノベーションも依頼。理想を実現した大満足の完成になりました。

### 東京都世田谷区Ｆ様邸

**～家族構成～**

２人　夫婦

**～年　　齢～**

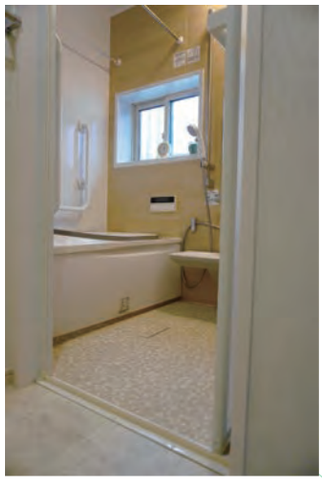
夫：80代後半
妻：80代後半

**～ご家族の身体状況～**

奥様は心臓が悪く、歩行には杖を使用。夫妻ともに要介護２

**～リフォームにあたっての要望～**

- 段差解消を中心に安全性を向上
- １階だけで生活できるように
- 温かく（特にトイレや浴室）

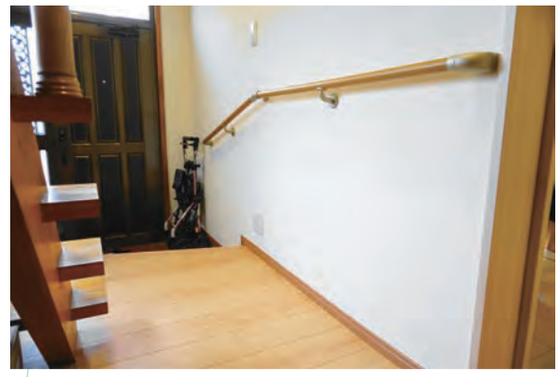


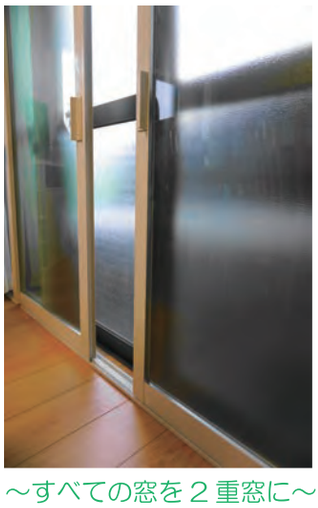
## ～浴室も安心快適に～

以前は浴室の床が低く、大きな段差がありました。深くてまたぐのが大変だった浴槽も、ちょうどいい高さのものに変更しています。

## ～玄関の手すり～

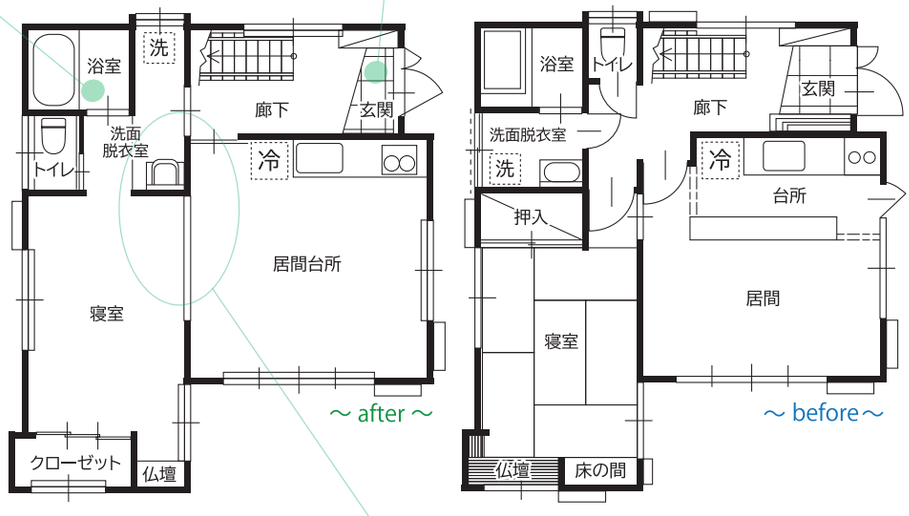
玄関ドアからリビングまで、移動範囲をカバーしている手すり。奥様の身長や姿勢に合わせて施工しています。





## ～すべての窓を２重窓に～

本州では、まだ珍しい2重窓。すべての窓を入れ替え、暖かさが各段に向上。屋外からの騒音も大きく軽減しました。




※間取りを変更した１階のみ紹介しています

## ～回遊動線を取り入れて移動もラクラク～

居間と寝室の壁を大きな引戸に。１階部分をぐるりと１周できる回遊動線を設けたことで、家の中の移動が格段に楽になりました。収納も撤去してトイレの位置も変更。憂鬱な夜中のトイレも、これなら楽に行けます。

**DATE**

構　　造 木造在来工法
延床面積　86.96 ㎡（26.30 坪）
１階床面積　44.41 ㎡（13.43 坪）
２階床面積　42.55 ㎡（12.87 坪）


設計・施工

㈱土屋ホームトピア
世田谷支店

東京都世田谷区用賀 2-35-6

☎03-3707-5422

https://www.hometopia.jp

リフォーム部門

# 優れたデザインと機能性で生活をエンジョイできる家

まるでリゾート地のカフェのような洗練されたデザインと共に、介助の負担を軽減するための配慮が随所に施されています。リノベーションしたばかりの住宅を購入したので、部材や設備を流用しながら費用を軽減。そのぶんご夫婦の好みに合わせて素敵なデザインを実現できました。

## 情報収集と意見交換で理想を実現

Kさんご夫妻の長女には先天性多発奇形と運動発達遅滞があり、生活のほぼ全般で介助が必要です。ご家族は以前まで借家の一軒家で生活していましたが、小学校3年生になり身体も大きくなった長女を介助するための負担が増してきました。先々のために負担を軽減できる家が必要と考えていたところ、リノベーションして間もない中古物件を見つけました。間取りなどを吟味すると、その物件は理想のバリアフリーにできるだけでなく、流用できそうな部材なども多く予算を抑えられることから購入を決めます。

パートナーに選んだのは、Kさんご夫妻の好みにぴったりの家づくりを手掛けてきた企業ですが、バリアフリーの実績はほぼありませんでした。そこでKさんご夫妻の希望を伝え、双方で情報収集しながら意見交換を繰り返し、プランを練り上げていきました。特にKさんご夫妻が理学療法士などから収集した情報は具体的な製品名なども多く、大変役立ったそうです。

介助の負担軽減と共にKさんご夫妻が重要視したのは、自分たちの趣向にぴったりの家づくりです。機能性だけでなく暮らしをエンジョイでき、長く愛着を持って住める家づくりを目指した結果、まるでリゾート地にあるカフェのような洗練されたデザインに機能性、暮らしやすさが一体となった大満足の完成になりました。

北海道石狩市　K様邸

**～家族構成～**

3人　夫妻・長女

**～年　齢～**

夫：30代後半
妻：40代前半
長女：8歳

**～ご家族の身体状況～**

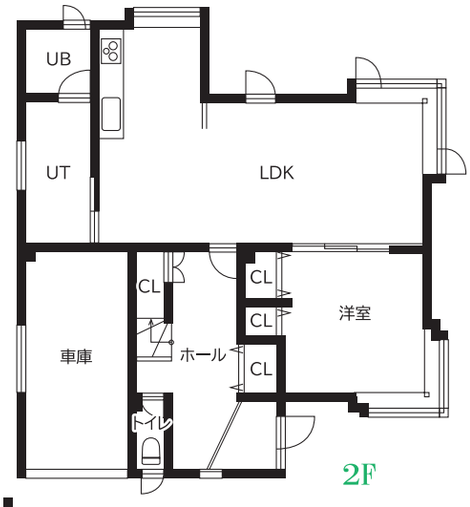
長女に先天性多発奇形、運動発達遅滞があり生活のほぼ全般に介助が必要

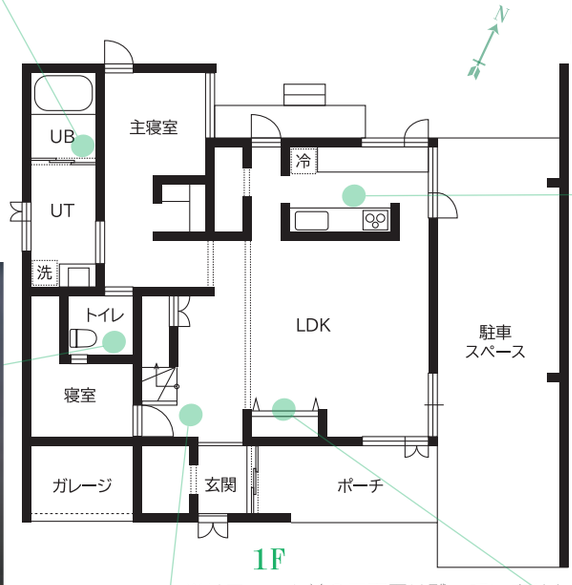
**～リフォームにあたっての要望～**

- 現在から将来に渡って長女、同居者、介助者が快適に過ごせる
- 家族の好みを最大限取り入れたデザイン

## ～浴室の工夫～

長女を座らせて対面で介助できるよう、段差の大きい浴槽を採用しました。入浴後の介助には、女性でもらくに持ち運べるリクライニングチェアを使用しています。

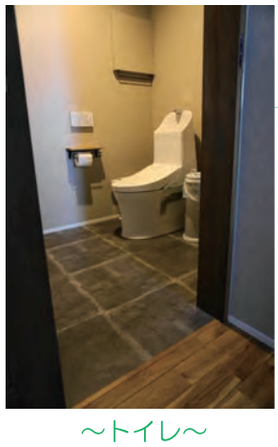



※リフォーム前の平面図は残っていません

## ～キッチン～

本物のタイルを施工しているキッチンからは、リビングで過ごすことの多い長女の様子をしっかり見ることができます。

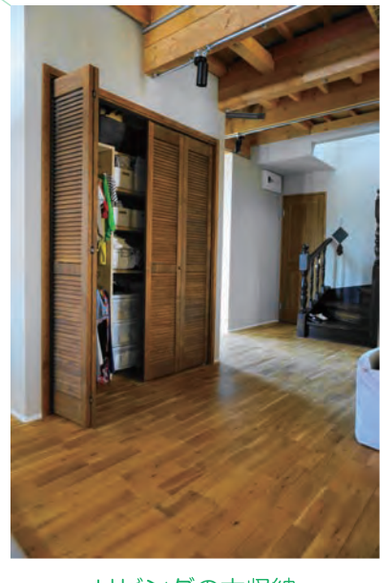


## ～トイレ～

寝室のすぐ脇にトイレを配置。介助者が入っても余裕のスペースです。

## ～トイレを車いすスペースに～

アーチ型の開口部がある車いすスペースは、もとのトイレ。階段まで続いていた壁を撤去し、トイレの位置を移動することで造ったスペースです。



## ～リビングの大収納～

長女のものを、ほぼすべて収納できるスペースをリビングに設けました。先々福祉サービスを受ける可能性も考慮し、どこに何があるか誰にでもわかりやすく、そしてものを出し入れしやすい場所に、というアイディアです。


設計・施工

リノベ札幌㈱

札幌市西区八軒 5-4-1-15

☎011-213-5410

https://renoves.jp


**DATE**

| | |
|---|---|
| 構　　造 | 木造在来工法 |
| 延床面積 | 156.50 ㎡（47.25 坪） |
| 1 階床面積 | 92.74 ㎡（28.00 坪） |
| 2 階床面積 | 63.76 ㎡（19.25 坪） |

リフォーム部門

# MSの特性を見極め、機能性デザインとも極上の完成に

機能性だけではなく美しいデザインにもこだわりました。専有スペースはスケルトンにすることが可能だったので、車いすでも移動できるバリアフリーが可能に。対面キッチンにはペニンシュラタイプに変更することで周囲をスッキリとさせるなど、数センチレベルでスペースを確保し、車いすでの移動や家事がしやすいよう配慮しています。

## 住み慣れた場所での暮らしを維持

Yさんの奥様は不慮の事故で脊髄を損傷し、下半身麻痺の状態になりました。多くの人にとって自身や家族が障がい者になることを想像すること、障がいを想定した住環境をあらかじめ整えることはなかなかできません。Yさんご夫妻が生活していたのは東京都内の一般的なマンション。生活する上での利便性や環境面では申し分ありませんが「身体が不自由になった妻が暮らしていけるのか、大きな不安を抱えました」と振り返ります。

人口が密集していない地域の一軒家を購入、あるいはYさんのご実家などをリノベーションして転居することも考えましたが、知人などから多くの情報を集めるうち、バリアフリーの事例が豊富な土屋ホームトピアのことを知ります。すぐに相談することにしました。

バリアフリーにするには制約の多いマンション。しかしYさんご夫妻が住むマンションには2つのメリットがありました。1つはエントランスが大変広い点。マンションの場合、居室を快適にできても共用部分が狭いため外との出入りが困難というケースが多いからです。もう1点は居住スペースをスケルトンにできること。より自由度の高いリノベーションが可能になります。

ご夫妻の希望がプロならではのアイディアによって形になり、機能性とデザイン共に極上の完成となりました。

### 東京都世田谷区 Y様邸

**～家族構成～**

2人　夫妻

**～年　齢～**

夫：50代前半
妻：50代前半

**～ご家族の身体状況～**

奥様の両下肢麻痺で歩行ができない。生活動作の大部分は介助不要

**～リフォームにあたっての要望～**

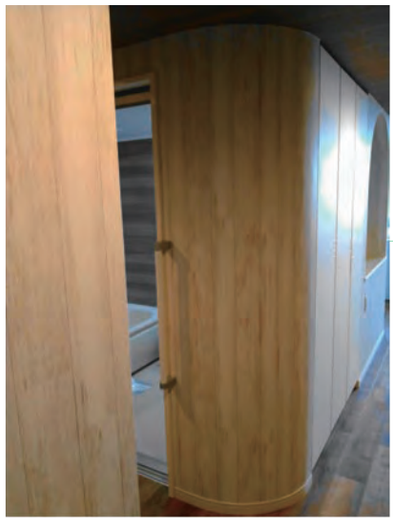
- 車いすのまま移動できる
- 水回り機器を夫婦が共用できるように
- デザイン性も重視したい

## ～２段階開閉式のトイレの扉～

２段階式に大きく開閉する扉、跳ね上げ式の手すりを採用したことで、スペースを広げなくても車いすから移乗してトイレが使用できるようになりました。

## ～洗面台～

足元がすっきり、車いすでも使用しやすいフロートタイプの洗面台を採用しました。



## ～水回り入口のアール壁～

車いすでも水回りまでのアプローチがしやすくなりました。見た目も開放的で美しいデザインです。

～ after ～　～ before～

## ～開き戸を開口に～

寝室の出入口は開き戸からドアのない開口にしました。カーテンなどを下げれば寝室は見えず、車いすでの出入りも容易です。

## ～浴室～

座面がリモコンで上下に動くバスリフトと必要な箇所に手すりを施工して、奥様ひとりでも入浴できるようにしました。


設計・施工

㈱土屋ホームトピア

世田谷支店

東京都世田谷区用賀 2-35-6

☎03-3707-5422

https://www.hometopia.jp


DATE

構　　造　鉄筋コンクリート造

専有面積　70.40 ㎡（21.30 坪）

明治通りと吉野通りが交差する「泪橋交差点」は山谷の玄関口。高度経済成長期、早朝になるとこの場所には仕事を求める労働者、仕事をあっせんする「手配師」と呼ばれる人たちであふれ返った。

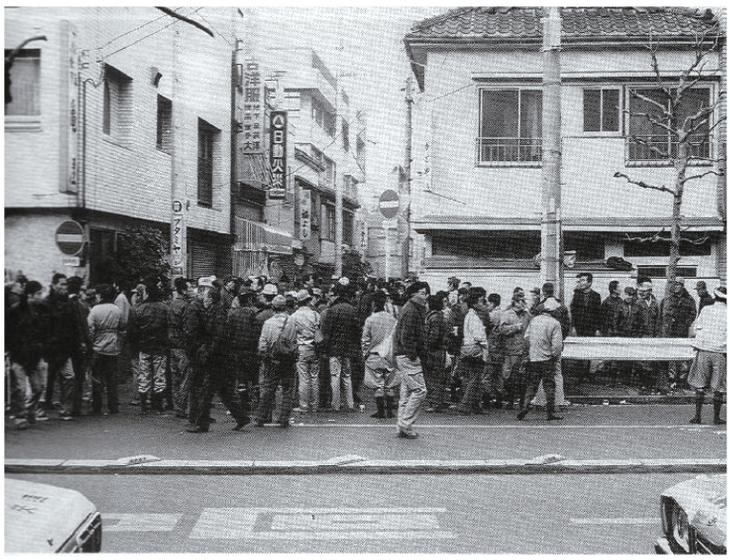
# 労働者の町から福祉の町へ
# 山谷の「今」を訪ねる

かつては労働力の供給地「寄せ場」として、多くの日雇い労働者が暮らした東京・山谷。時代の流れに翻弄されるこの場所で生きる人々を長年に渡って支援しているＮＰＯ法人「山友会」を訪ね、現在の山谷を取材してきました。

## 蔑まれてきた地域・山谷

山谷は台東区・荒川区にまたがる地域。町名としての山谷は昭和41年に無くなりましたが、今でも地域には山谷という呼び名が根付いています。面積約1・65㎢の狭いエリアには「ドヤ」という通称で知られる簡易宿泊所が密集しています。簡易宿泊所とは1948年に公布された旅館業法に基づく条件を満たした形態の宿泊所のことで、旅館やホテルよりも狭い床面積、施設面での条件などが緩いことから開業許可も得やすく、1泊2千円前後という低価格で営業しても利益を出せるメリットがあります。第1回の東京オリンピック開催直前の昭和38年には山谷に222軒ものドヤが立ち並び、約1万5千人の労働者が宿泊、というより居住に近い形で生活しながら、建設ラッシュに沸く東京及び近郊の日雇い労働に従事していました。高度成長を迎え、引きを切らない建設現場での労働需要。誰もが日雇い労働に従事できる状態でした。

昭和52年の泪橋交差点付近の様子　※東京都山谷対策本部資料より



「全国から集まってくる労働者のなかには出稼ぎとしてやってきて、それなりの収入を得て地元に戻る人々もいた一方で、様々な事情で地元に居られない人などが多かったようです」と解説するのは、1984年から山谷の住民に無料診療をはじめ様々なケア、サポートを行ってきたNPO法人「山友会」の油井和徳副代表。「そのような人たちは、社会から孤立したり、排除される立場であることが多かったんです。山谷は労働者を供給する寄せ場としてだけでなく、そういった行き場のない人たちを受け入れてきた地域でもありました」という油井さんの説明は、この山谷だけでなく横浜の寿町、大阪の西成といった、国内にある他の寄せ場にも共通しているようです。

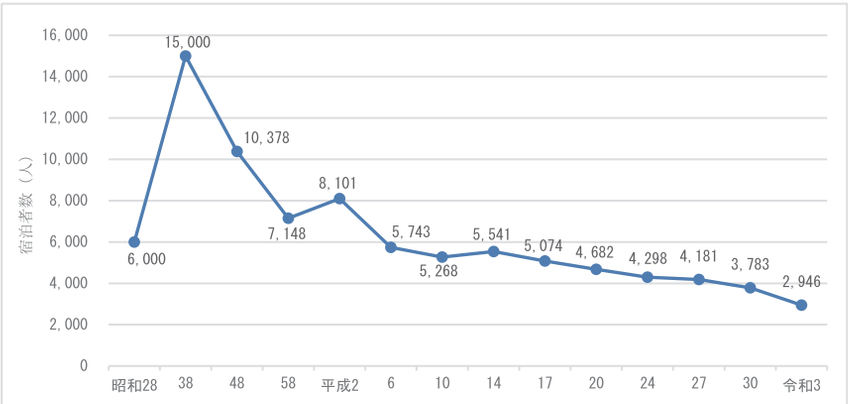
現在9名の医師は全員ボランティアで診療に従事している。　※写真提供：山友会

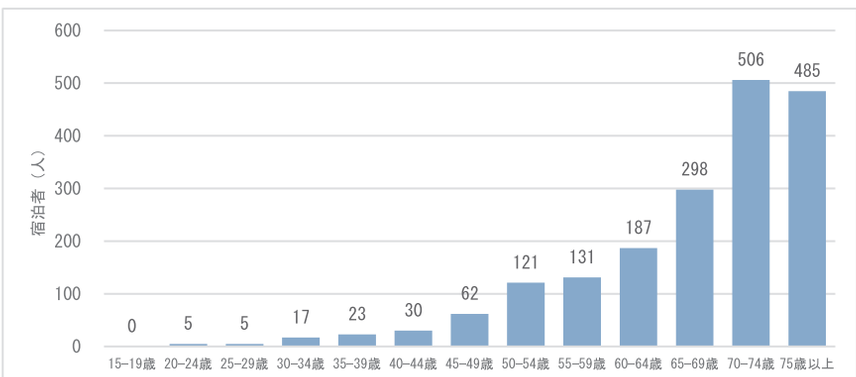
## 労働者に無料で診療を

山友会は、山谷でアルコール依存者の回復支援活動を行っていたキリスト教の神父、医師らによって設立されました。80年代に入った山谷では最盛期の労働需要が減少したことから、仕事に就けないためドヤに泊まれず野宿する人たちも増加。過酷な労働や先の見えない生活が起因してのことか、アルコール依存症や、それに伴う肝炎・肝硬変、けが、暖をとるための

焚火での火傷などが多発していました。設立者の皆さんは、そうした人たちへの医療的ケアの必要性を感じていましたが、健康保険、労災に入れずに仕事をせざるを得ない労働者たちが病院に罹れないケースも多数ありました。そこで無料診療を行う機関として発足したのが山友会で、民間で完全無料診療を行っている日本で数少ない医療機関です。

現在の山友会クリニックは医師9名、鍼灸師2名、マッサージ師1名、看護師3名(常勤1、パート2)という陣容で、診療のコーディネートを行う看護師以外は全員がボランティアで従事しています。設備、医薬品の費用、看護師の人件費といった運営の財源は寄付が主で、発足当時から変わりません。医薬品の処方や問診、触診、検査器具も限られているので初期診療のみを行っています。専門的な治療が必要な場合は生活保護などの福祉制度の利用をサポートして、地域の医療機関につなぎます。「山友会クリニックは、いわゆる山谷地域の保健室的な役割を担っています。経済的困窮他なんらかの理由で医療にアクセスできない人たちが相談できる機関という位置づけです」と油井さんは説明します。医療機関とのつなぎ役だけでなく山友会で診療を行うことによるメリットもあるそうです。「大病院だと診療時間が短いことも多いようですが、当会ではゆっくり診療ができます。また地域医療につなぐ役割にあたって、ボランティア医師たちの持つネットワークも活用できるメリットもあります。長く関わってくださっている医師が多く、こうした特殊な地域の患者さんたちへの対応にも慣れているんです」。



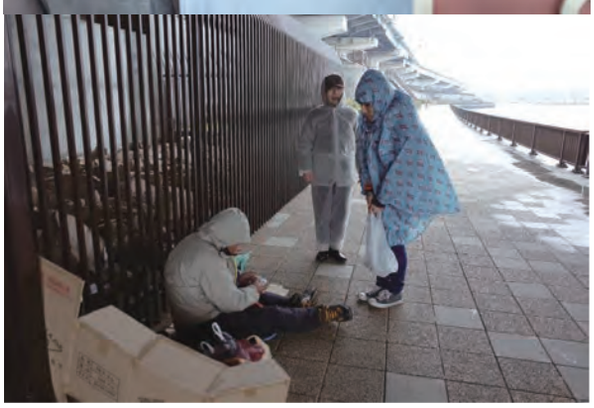




山谷のドヤ＝簡易宿泊所の利用者数の推移（上）と令和３年の利用者の年齢層（下）。
※東京都山谷対策本部資料より

## 診療以外に拡大する支援

無料診療を提供し続けるだけでも大変な困難が想像できますが、山友会は創成期から診療にとどまらない活動を行っており、現在も継続しています。そして活動内容は、時と共に多岐に広がってきました。

設立した80年代は日雇い労働者が多く集まっていた時代でした。なかには高齢となった元労働者の人々もわずかにいました。そこで職にあぶれた人たちに向けての炊き出し、高齢者が集まれる居場所を作るといった活動、そして診



現在でも後を絶たない地域のホームレスの人たちに、山友会のスタッフが声掛けしながら支援の方策を模索している。
※写真提供：山友会

療だけでなく生活や健康上の問題に対する支援などを行う相談室なども設置しました。油井さんは「活動が始まったころは、まだ野宿者や日雇い労働者への対応が多かったんです。凍死などの路上死をさせないための活動などが中心であり、当会の大きな問題意識でもありました」と説明します。

その状況が変化しはじめるのは平成3年頃からです。バブル崩壊の時期で、山谷の労働者は慢性的に失業するようになり、生活保護受給者が急増しました。「当時はおそらく都内全域で5千人近い路上生活者がいたはずです。生活保護受給者も急激に増加しましたが、そういう人たちの受け皿が絶対的に不足していった時期でした」と油井さんは振り返ります。都内の生活保護法に基づく保護施設などではキャパが足りず、山谷地域のドヤがその受け皿として活用されるようになっていきます。

同時期から生活困窮者や高齢者の居住や生活を支援するＮＰＯなどが少しずつ山谷で増加し、身寄りのない高齢者、障害のある人たちなどを、地域の中で支えていく取り組みが増えていきました。新たなステージに入った山谷は「労働者の町から福祉の町に変わった」と言われるようになります。

## この場所は持続可能なのか

時代の要請に応えるように、山友会でも２００９年から支援付き住宅「山友荘」を開設。そのほかにも地域の人たちが孤立しないよう、一緒に生きがいをつくるためのさまざまな事業を新たにスタートします。

現在の山谷について「ドヤで生活しているのは3千人ほどで、うち9割が生活保護受給者、7割が高齢者です。寄せ場としての機能は無くなり、まさに高齢者の町になっています」と油井さんは説明します。インバウンドが活況を見せ始めたコロナ禍前、テレビなどで「山谷はバックパッカーなどの受け入れが盛んになっている」と紹介する番組もありました。かつては観光客を拒否し、労働者だけを超低価格で迎えたドヤが、海外からのバックパッカーなども受け入れるようになっている、というのがテレビの説明です。「２００２年のＷ杯以降海外からの旅行者を受け入れる旅館が出てきました。しかしそれは全体の1割程度のようです。観光客相手の施設に転用できる資本力があるドヤは限られています」。そう油井さんは説明しつつ、山谷の象徴ともいうべきドヤの今後に対して大きな危機感を抱いています。「昔ながらの個人経営の旅館が業態変更するのは難しいし、後継者問題などで廃業するドヤも出てきました。その跡地にマ

ンションなどができるケースも増えています。ドヤは今でも約3千人の人たちの、なくてはならない生活の場。ドヤが別の物に建て替えられていくと、今山谷で暮らしているような方たちの住まいが失われることになります。都内だけ見ても、こうした人たちの住まいの受け入れ先は足りません。家賃補助の制度も不十分だし、一般のアパートなどに入居するのは極めてハードルが高いのが現状です。我々を含めて山谷で様々な支援活動を行っている団体も、利用者の皆さんの生活の場があってこそ支援ができています」。

油井さんの危惧はドヤの存続だけにとどまりません。支援のベースとなる制度やシステムの問題です。「居住支援や生活支援の主な利用者は生保受給者です。要介護者など生活支援を手厚くしなければならない利用者が多くなっても、その対価を回収するのは難しく、運営者の善意で支えられている部分もありました。山谷の居住支援は『無料低額宿泊所』の届出によって行われている施設が多いのですが、これらの施設の多くが2020年の生活保護法の改正によって創設された『日常生活支援住居施設』に認定されたことで、生活支援の対価が制度的に給付されるようになりました。それでも、重度化する利用者を支え続けるためのケアコストや修繕費、設備の改修費などのコストの捻出を考えると財源的にまだ厳しいのが現状です」。

現行の制度、システムを基盤に、持続可能な支援体制をいかに持続可能にしていくべきかという課題は、山谷という1つの地域の支援団体全般に共通している課題として議論され続けているそうです。そしてこの課題は山谷だけでなく、全国の福祉事業を担っている団体、事業者全体にも共通した課題なのではないでしょうか。

福祉関連の事業体が長年頭を悩ませ続けている人材確保の問題もその一貫で、やはり山友会にも大きな課題として横たわっています。今やどの業界も人材確保に四苦八苦していますが、福祉業界は以前からその悩みを抱え続けてきました。「人助けをする尊い仕事というだけでは、人は集まってきません。人材不足は、それこそ支援する側における持続可能が危ぶまれる大きな課題だと思います」。

## ドヤがあってこその山谷

かつての山谷は、ガラの悪い労働者が路上のどこかしこで酔いつぶれている、得体の知れない人の集まる場所と忌み嫌われてきました。しかし景気の良し悪しを調整する緩衝材としての大きな役割を

2015 年の炊き出しの様子。実施場所の隅田川に長蛇の列ができた。炊き出しも山友会が発足当時から行っている支援活動。
※写真提供：山友会

山谷の象徴であるドヤは少しずつ減少しつつある。一般向けの宿泊施設に転身したドヤは全体の 10%程度とみられる。

果たし、その役割を担うがために仕事につけない労働者が現われ、路上生活を余儀なくさせられました。集まってくるのが労働者から高齢者に変わった現在も、やはり日本社会の緩衝材のような役割を果たす場所になっていると思えてなりません。

「山谷の街並みはドヤによって特徴付けられてきました。かつてドヤは労働者が集まる装置の役割を持っていました。現在は身寄りのない低所得の人たち、高齢者、障がい者、賃貸住宅を確保しにくいような人たちが集まる装置になっています。ドヤが無くなることで、そうした社会的に孤立し、住まいや居場所を失いやすい人たちの受け皿が失われていくことになっていきます」という油井さんの言葉は、まさにその通りなのではないでしょうか。

その山谷に変化の波が来ているのも事実です。油井さんの話にあったように、ドヤは一軒また一軒と減少しつつあります。「2012年にスカイツリーが完成した前後も、この周辺はどうなっていくのかという話が出ていました。実際大きな変化は無かったのですが、しかし最近になって、変化というのは急激ではなく、静かに進んでいくものと実感しているんです。静かな変化の中で、気が付くと大切なものを失っているのかもしれません」。油井さんはそう言います。

危機感と不安の中でも変わらずに、山友会は懸命に支援活動を続けています。「ここ山谷に居続ける人たちのなかには、この場所に愛着を持っている人もいるし、ほかに行き場の無い人たちも多いです。しかし、ここにいる人たちを地域社会から排除されたままにせず、地域で暮らす1人の人間として、自分が暮らす地域をより良くしたいと思えるような働きかけを、私たちは今後も続けていかなければならないと思っています。さまざまな事情があって山谷に流れてきた人たちが繋がりを作っていける、誰かに相談ができる、集まれるコミュニティを作っていくために、我々は活動をしています。地域の変化があれど、我々はそうした人たちの居場所を守っていく覚悟です」。

身寄りのない利用者のために共同墓地を建立した。「亡くなった後でも仲間」という山友会の想いが込められている。　※写真提供：山友会

取材を終え帰る頃になると、あちこちのドヤに住む、もと山谷労働者の皆さん「ヤマのおじさんたち」が、山友会の事務所に設けられたフリースペースに集まっていました。身ひとつ、孤独と過酷な労働に耐えてきた皆さん。でもその日はワイワイと楽しそうに、よもや話に花を咲かせていました。

今年もまた北海道内外の、国内最先端と言える素晴らしいバリアフリーの事例を直に取材させていただくことができました。ご協力いただいた施主の皆様並びに設計・施工会社の皆様に謹んで御礼申し上げます。

昨年同様、今回も初めて施主様と共にご応募いただいた企業が多数ありました。中には「バリアフリーの建築ははじめて」という企業もありましたが、素晴らしい作品を残し、当財団の審査員諸氏の高い評価を受ける結果となっています。そういった皆様の誠実な取り組みがあるからこそ、バリアフリーの確実な進化があることを、今回発行する33号となった「ふれあい」にて広く知っていただきたいと願うばかりです。

(公財)ノーマライゼーション住宅財団

第33回
2023 福祉住宅建築助成実例集
ふれあい

公益財団法人
編集・発行　ノーマライゼーション住宅財団
〒060-0042　札幌市中央区大通西16丁目2-3　ルーブル16　9F
電話(011)613-7551　　FAX(011)612-8431
http://www.normalize.or.jp/

2023年8月発行

すべての人にやさしい住まいの環境を考える
Normalization Housing Foundation

総額300万円

# 福祉住宅・福祉小規模集合住宅

# バリアフリー建築

2023年度　第35回

# 助成

「すべての人が共に暮らし共に生きることがノーマル(正常)である」というノーマライゼーション理念に基づき、高齢者や障がい者にとっても安全・安心で快適に暮らせる住生活環境の整備・向上のため、助成金により福祉住宅の建築を支援いたします。

**助成の対象者**

高齢者や障がい者が安心して暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても安心して生活できる住宅として新築やリフォームした建築主
※原則として2022年12月以降に工事が完了した物件

| | |
|---|---|
| 福祉住宅 | 新築(バリアフリーにした物件)やリフォーム(住宅内外の手すり・スロープ・トイレ・浴室等)の住宅改善・改修した建築主 |
| 福祉小規模集合住宅 | グループホームや高齢者向けアパートなど(10名程度居住)の建築主 |

**応募期間**

2023年5月1日～11月30日(必着)　年1回公募

**応募先**

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団
〒060-0042　札幌市中央区大通西16丁目2-3 ルーブル16 9F
TEL: 011-613-7551
FAX: 011-612-8431
E-mail:zaidan@tsuchiya-grp.com
http://www.normalize.or.jp/

詳しくは
ウェブサイトを
ご覧ください→

主催　公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

後援　北海道　社会福祉法人北海道社会福祉協議会
札幌市　社会福祉法人札幌市社会福祉協議会　北海道デザイン協議会

福祉住宅の実例、財団の活動に関しては

ノーマライゼーション住宅財団のホームページをご覧ください

http://normalize.or.jp